令和4（2022）年1月7日　第98号

甲斐の金山から 博物館だより

国指定史跡・甲斐金山遺跡／湯之奥・中山金山　甲斐黄金村･湯之奥金山博物館報

～茅小屋金山採掘域調査にて～（2021.12.3）

25年目の新春を迎えました

2022年は、初日開館から例年にないほどの多くのお客様にご来館いただき、縁起の良い25年目の新春を迎えました。そう、当館にとっても大きな節目である今年、調査研究分野をはじめ多方面において大いに成果が挙げられることを目標に、今年も邁進してまいります。

《金山博物館の周辺から話題をひろって・６》

しんてき先生のこと あるいはある筆塚について

甲斐黄金村･湯之奥金山博物館　館長　**出月洋文**

あるとき調べもののために『下部町誌』（以下、『町誌』）を見ていて、ふと怪しげな（見慣れないというべきか）石塔の写真を目にしました（下図２）。それはいつもお世話になる同書の第３編の「町の歴史」とか、史跡や文化財を扱った第13編とかではなく、第4編の「集落と人口」でのこと（P.646）でありました。

冒頭に「あるとき」としましたが、その時にその問題の写真の存在をメモに残しており、その日付は４年前のものでした（図１）。そうしたスケッチ自体もずっと忘れていたのですが、昨秋、資料の整理中に出てきたのを目にして、にわかに実物を見てみたいという想いが高まり、いずれ「いでさんぽ」の題材になるかもしれないという打算もあいまって、師走に入ってその現地確認に出向いたのでした。

彼の『町誌』の記述をたよりに訪ねた現地は、身延町古関地区の、県道折門古関線にそって反木川沿いにある根子集落の下の方の諏訪神社でした（図６）。

しかし、目的の石塔はすぐには分からず、辺りをうろうろしてみたところ、神社の拝殿の脇の杉の木の根元に、倒れかかった石碑（図４）を発見。それはよく見ると筆の形のフレームの中に漢字二文字を配し、下方に氏子中の字を浮かべた杯が描かれたものであると見てとれました（図５）。この筆と杯の組み合わせは、後日にある書物によって理解することができたのですが、現地では謎のままとして、肝心の石塔の探索に打ち込むことに気が急かれました。

神社の西側に広がる墓地の中に課題の石塔（図３）を見いだしたのは、少しの時間を置いてからでした。ようやく『町誌』で見た石塔にたどり着いたのです。その石塔は墓塔で、同書の記述にもある「オゼンの台石の上にトックリの塔身、その上にサカズキをさかさにかぶせ、サカズキの糸尻の上には筆の穂先が立っている」という構成を目の当たりにすることができたのです。徳利型の本体の正面には「流筆真迪大和尚位」との文字が、また右側面に「明治十一年旧五月七日」との日付が刻されていました。

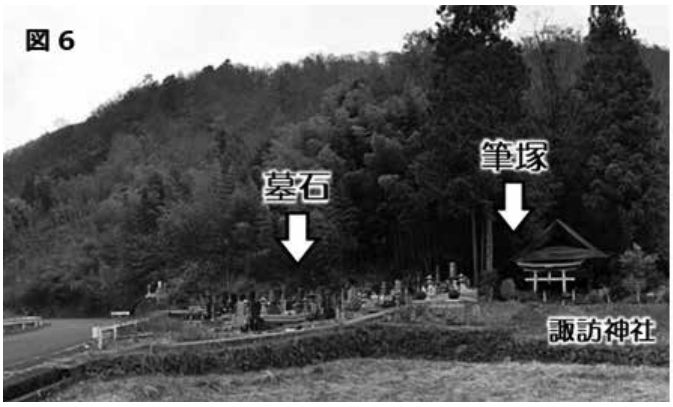
現地での確認情報は以上で、その後、館の蔵書からさらなる関連資料を探したところ、『下部町のくちづたえ』の中に関連の聴き取りが書きとめられていることに気付きました。２件ほどの思い出話ですが、１つは「真廸先生」、他は「しんてき先生」との題で両者はほぼ同じ内容、合わせ読むと、子どもの頃聞いた話として、江戸時代の終わりから明治の初め頃に、諸国をめぐっていた坊さんがこの地に止宿し、寺子屋を開いては地域の子どもたちに読み書きなどを教えはじめた。真廸先生として親しまれ、地元民の支持を得ていたようですが、やがて病を得て亡くなってしまった。生前、先生はたいへんお酒が

図１

図２

図３

図４　図５



好きだったことから、遺徳を偲びこうした墓塔を作ってさしあげた。別に筆塚の石碑も建てられている、そんなことが読み取れたのでした。

なお、これらからわかったことですが、図４と５に示した、現地で最初に目にした石碑は、正面に「真廸」の文字が刻まれた先生の教えに対する教え子等の筆塚だったのでした。筆塚については事前に若干の知識はあったのですが、もっと塚状の形態をもつと思い込んでいたので、こうした形もあるんだなと、実際の歴史の幅を痛感したものでした。

お酒が大好きだった方は世の中にはけっこうおられて、同様な形態の墓塔を県内でも一、二見かけており、あわせて紹介したく思いますが、その１つは甲府市の東光寺さんの境内にある、甲府勤番の方の墓塔(図７)、２つめに同じく甲府市の円明寺さんのご本堂前にある墓塔(図８)があります。どちらも生前の有り様が浮かんで来そうな存在感を放っていますが、真廸先生のとの違いは、やはり筆の穂先。墓塔ではあるものの、そこにも筆塚の意味合いが込められているように思われました。

ところで『町誌』の記述によると、この墓塔や筆塚が建てられた場所は、かつて寺子屋があったところとされています。その寺小屋、もっというと本来の寺とはどのようなものだったのか、いま墓地となっていることもあって、そのあたりが気がかりです。根子には万福寺というのあって、江戸初期からの銅山開発と絡んでいるものですが、そちらとはだいぶ離れている、果たしてどのような奥行きがあるのか、歴史探訪には果てがないようです。

いでさんぽ⑪・内船編　峡南の秋の彩りを味わいに　10月31日(日)

11回目となる**いでさんぽ**は、秋の風情漂う内船の探訪で、2020年１月の「歴史と一足早い春」をテーマにした訪問に次ぐ２回目となる散歩となりました。鎌倉殿の時代に活躍し、身延山とのゆかりの深い四条金吾さんの墓所などの歴史探訪は前回とほぼ同じでしたが、今回は特に南部橋や身延線関係の橋など、土木遺産についても比重をおいての内容となりました。これまでの散歩はなぜか悪天候が多く、今回も時折小雨の天気でしたがそんな中でも、季節もですが、時代的にも変わりゆく峡南地域の姿を豊かに感じ取ることができた小旅行となりました。

これからの　館長講座＆「いでさんぽ」　は・・

第23回　館長講座　～シリーズ峡南の考古学

「富士山の信仰をめぐる考古学」

日 時：2022年２月23日（水・祝）13時30分～

第13回　いでさんぽ

2022年３月開催予定

※今後の開催予定や詳細は、決定し次第、博物館HP等でお知らせします。

秋～初冬にかけてのお客様が多数ご来館。有料入館44万人目も達成！

感染拡大状況が落ち着いた秋口から初冬にかけて、多くのお客様がご来館くださいました。個人のお客様をはじめご家族や友人同士、教育旅行での利用も多く、県内の小中学校や遠方からは福島県の高校、町内の生涯学習サークルなど、館内はとりわけにぎわいを見せました。

このようなにぎわいの中、有料入館者44万人目となったのは、11月21日（日）にご来館の韮崎西中学校2年生の皆さん。展示観覧・砂金採り体験をご利用いただき、金山の歴史に親しむとともに、記念入館者となり、生徒の皆さんは嬉しそうなようすでした。クラス全員で撮影した記念写真はショップ壁面に掲出しております。（※記念写真撮影時のみ、マスクを外して撮影しています）

なお、当館をご利用の際は、感染拡大防止対策の詳細・その他は公式HP「利用に当たって」のページをご確認いただきますようご協力をお願いいたします。

令和３年度　博物館運営委員会

11月25日（木）

館の運営や今後のあり方について先生方や有識者からご意見をいただき、より良い施設とするための諮問会議である運営委員会が行われました。開館25周年という節目の年に向けた励ましの言葉と、世代広くいろいろな方に利用していただけるようなより一層の工夫と、日本唯一の鉱山専門博物館、また甲斐金山遺跡ガイダンス館として、調査研究分野でも成果発表や情報発信をより行っていってほしいというご意見をいただきました。

もーん父さんは　いつだって博物館を全力応援！

広島県・呉市ご当地キャラ祭りオンライン参加

12月５日（日）

コロナ禍で多くのイベントが中止・延期となりましたが、一方で、この２年の間にオンラインイベントもスタンダードになってきました。遠方のイベントに気軽に参加できることがオンラインの大きな強みです。

このほど広島県呉市の西日本豪雨復興支援オンラインイベント「ご当地キャラ祭り」に当館のもーん父さんが参加しました。心配なく各地の往来ができるようになった暁には、全国から多くのお客様にお越しいただきたいという願いを込め、５分間の生配信で博物館と砂金採り体験の紹介をしました。全国各地の方々に、当館の魅力を伝えるよい機会となりました。

～北海道今金カニカン岳踏査～

11月２日(火)～４日(木)

北海道道南に位置する今金町に位置するカニカン岳（980.7m）は、その周辺が砂金・柴金採掘遺跡として古くから知られ詳細な調査実績があり、詳細にまとめられた報告書が刊行されています。山金採掘については、昭和後期頃に３点の金挽臼の存在が確認されており、山金採掘の歴史認識はあったものの柴金遺構ほど注目されていませんでした。近年、今金町教育委員会が中心となって「今金町文化財保存活用地域計画」の一環として、カニカン岳における山金採掘について“重要遺跡遺構調査”が進められています。カニカン岳周辺の美利河や花石地区の砂金採掘遺構の基礎情報については、調査報告書や論考がありますが、それらを参考にしつつ、今回のカニカン岳の金山跡踏査と、報告がなされている金挽臼３点について実見したようすをリポートします。

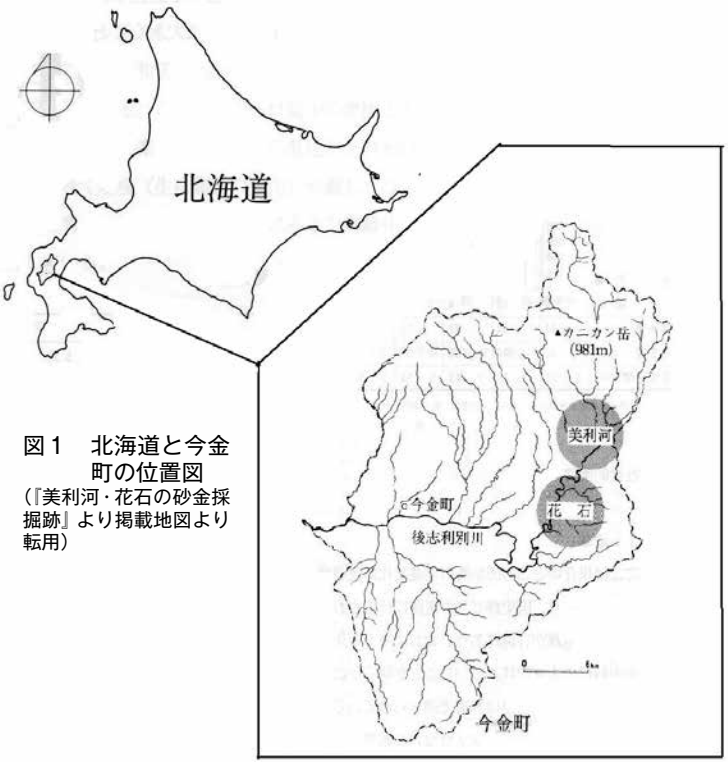


図１　北海道と今金町の位置図
（『美利河・花石の砂金採掘跡』より掲載地図より転用）

カニカン岳の尾根沿いに整備された登山道をのぼっていくと、中腹付近に採金活動を行った「柴金遺構」と「山金遺構」が確認できます。登山道には山道地点（出発点～８合目）を示す小さな案内板が設置されており、案内板５～７合目付近の登山道両側に溝状遺構ならびに露頭掘り跡の点在がみられ、7合目には坑道が開口しています。これらの遺構の現況と特徴は、次の通りです。

溝状遺構…5合目付近の山斜面の溝状遺構に沿って下った所に幅３m、深さ1.5m～２m、長さ約20m、可能な限り下りきった地点周辺に露頭掘り跡も確認した。登山道沿いにはこうした溝状遺構が複数本確認できたが、おそらく同様の形状を呈しているものと推察される。

竪穴状遺構…６～７合目区間に登山道から俯瞰すると坑口のように見えた個所を、登山道から下に向かって降り目視したところ、登山道直下から脈を追って深く掘り込んだ採掘跡であることがわかる。これが下流に向かって掘り進められ、結果、溝状遺構を形成しているが、採掘跡壁面に岩盤や脈筋等は一切確認できない。なお、今後の詳細な山中踏査が必要ではあるものの、今回カニカン岳登山道沿いを歩いた限りでは付近に鉱石の露出は見られず、7合目の坑道内と同様の軟質な真砂土（風化によって母岩である花崗岩が砂状化したもの）に覆われている。

露頭掘り…小規模なものがクレーター状に点在し、6合目～7合目の登山道両側に多数確認でき、詳細に踏査すればさらにその数は容易に増えると思われる。

7合目付近の坑道…幅１m、高さ0.8m、坑道の長さは約10mとされる。坑道内部を観察したところ、現況では岩盤ではなく全体が一見泥壁のように見える真砂土に覆われている。

坑道内も溝状遺構も現在露出している壁面はすべて軟質な真砂土に覆われており、採金活動もこの地質に合わせた柴金採掘が行われたものと思われる。

遺跡調査リポート

カニカン岳３点の金挽臼について

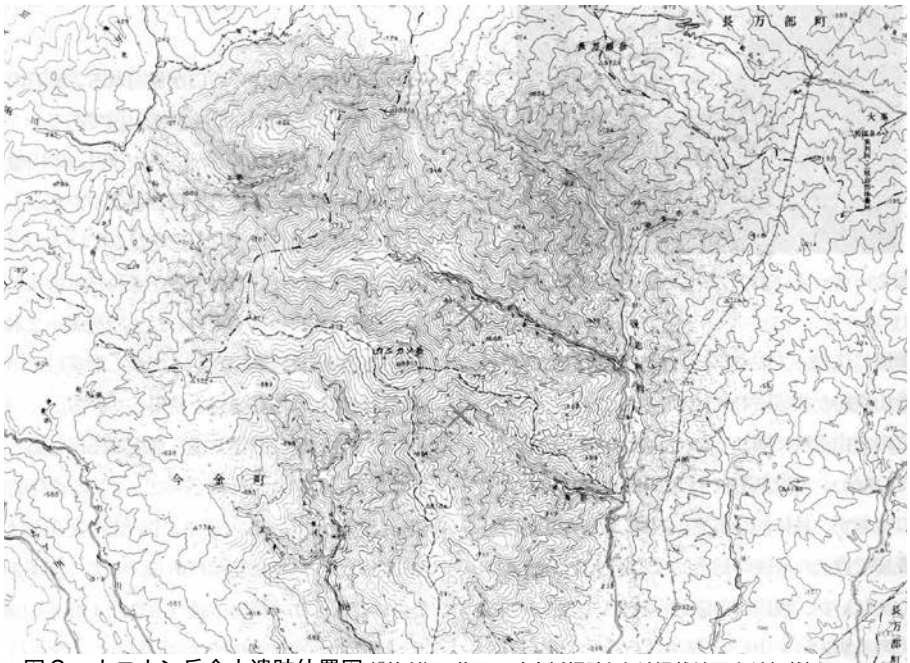


図２　カニカン岳金山遺跡位置図（『美利河・花石の砂金採掘跡』より掲載地図より転載）

昭和40年代に回収されたもので、現在今金町教育委員会で保管、ピリカ旧石器文化館にて展示されています。この金挽臼の発見経緯や資料情報は、寺崎康史氏により1996年に取りまとめられた検証やデータを元に、写真を添付して改めて掲出しました。

さて、３点の鉱山臼ですが、カニカン岳登山道尾根を挟んで北側にペタヌ、南側に茶屋川という位置関係の中で、ペタヌ川採集の1点は「黒川型」、茶屋川採集の２点の上下は「定形型」であることは従来の報告通りでした。現時点では、カニカンでは1600年代初頭～中頃に山金採掘が行われていると考えられています。２つの型が確認され、また多数の臼がテラスに点在していたという過去の確認情報があるため、山金最盛期がどこに該当するかをある程度確定させるためには、これら金挽臼の型の割合を確認したいところです。

遺構周辺は軟質な真砂土が特徴であるにも関わらず、確認されている金挽臼は、いずれも大型に分類されるサイズで、堅い鉱石の粉砕を試みたタイプのものと見受けられます。したがって表土に現れている真砂土を粉成の対象物とするなら、ここまで大型である必要はないはず。しかし、確認されている上下金挽臼のいずれも、重量30kgオーバーの大型です。加えて、茶屋川のテラスに今も残されているという金挽臼もまた同等サイズの大型臼であることが報告されています。（今回は時間がなく確認できませんでしたが）ということは、これらの金挽臼の存在は、溝状遺構や露頭掘り跡とは別に、硬い鉱石を主体とした採掘域があることを裏付けるものになり得ます。また昭和10年に実施された北海道工業試験場による調査では「・・・同川の支流茶屋川付近の地域にその中心を有せしなるべく現時此川に面せる斜面に多数の小坑道を認められる」と述べています。つまり、これら坑道群の再確認が必要ではあるものの、山金採掘域の存在の根拠では・・・？

砂金採取文化が主流の北海道ですが、カニカン岳周辺の地質もまた、その大部分が花崗岩で形成されており、砂金が多量に産出される条件を作りだしています。故に美利河や花石のような大規模な砂金採掘跡が確認できるわけです。この砂金採掘跡が広大に展開する土地柄を考慮せずして、この地の山金採掘を語ることはできません。カニカン岳において砂金と山金、そして柴金は切っても切れない関係にあると言えます。今後の研究やさらなる踏査が必要ですが、山中の遺跡現場の形状を見る限りでは「山金」と「柴金」が混在しているように見えます。

これまでの報告書おいて“砂金採掘跡”という表記が圧倒的に多いが、砂金、柴金、山金を特徴的に区別出来るものは、それぞれ使い分ける方がより遺構や遺跡をわかりやすく伝えてくれるだろうと思います。もしかしたら、カニカン

岳山中では、佐渡金山における“大流し”のような採金活動が行われていたのではないかとも考えられるわけで、金山の歴史解明の夢は膨らみます。ただし、歴史解明において現場踏査が不可欠です。カニカン岳も登山道はいいのですが、登山道を逸れて山中を踏査するとなると、標高の割にはなかなか厳しい山です。遺構に行きつくまでの山斜面のすべてが、高さ２mをゆうに超えるマガリダケの群生で遮られており、目的地まで到達することは難渋を極める状況であるということが、カニカン岳での調査すべてにおいて言えることであり、またネックでもあり、今後の調査の大きな課題の一つです。

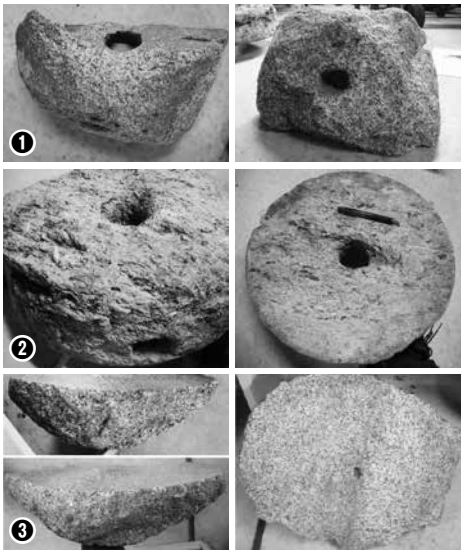
註・参考文献

１)『美利河・花石の砂金採掘跡』財団法人日本ナショナルトラスト、1995、２) 寺崎康史「カニカン岳金山跡発見の鉱山臼について」『今金地域研究』第2号、1996、３)『今金町　美利河１・２砂金採掘跡―後志利別川水系美利河ダム建設工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』財団法人・北海道埋蔵文化財センター、1981、1988、４)『今金町文化財調査報告書３　美利河３砂金採掘跡――般道島牧美利河線今金町茶屋川改良工事用地内埋蔵文化財発掘調査報告書―』北海道今金町教育委員会　1991、(５)『宮島１砂金採掘跡――般国道230号今金町国縫道路工事に伴う発掘調査報告書―』、2009、(６)『黄金郷への旅』矢野牧夫

金挽臼		黒川型　上臼
発見地		後志利別支流ベタヌ川
発見年		1969年頃
材　質		花崗閃緑岩
法量他	直径	44cm
	厚さ	26cm
	重量	35.5kg
	供給孔	Φ7.5ｃm
	軸跡	2カ所　5.5cm、6cm
	軸径	14mm
ものくばり・柄穴		3(巴型)・4(方形)
その他		50%欠損、回転痕有

金挽臼		定形型　上臼
発見地		カニカン岳　茶屋川
発見年		1971年頃
材　質		優白岩（アプライト）
法量他	直径	46cm
	厚さ	9cm～15cm
	重量	37kg
	供給孔	Φ7.5ｃm
	軸跡	2カ所　5.5cm、6cm
	軸径	14mm
ものくばり・柄穴		2・2(方形)
その他		回転痕有

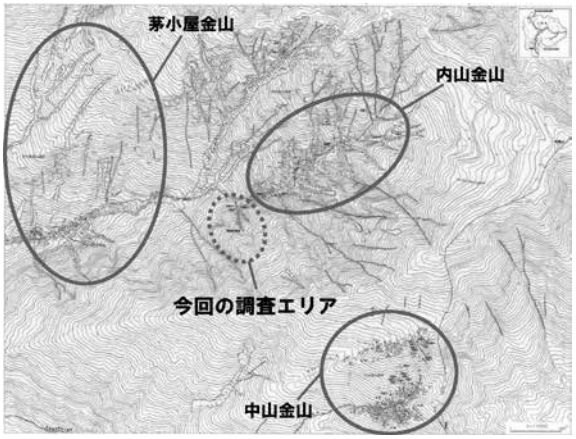
金挽臼		定形型　下臼
発見地		カニカン岳　茶屋川
発見年		1971年頃
材　質		花崗閃緑岩
法量他	直径	43cm―52cm
	厚さ	21cm
	重量	44kg
	軸孔	深さ2cm
	軸山	有
	軸径	2.2cm
ものくばり・柄穴		3(巴型)・4(方形)



茅小屋・内山金山採掘域確認調査

12月3日(金)

湯之奥の茅小屋・内山金山は、中山金山とは尾根を違えて、入ノ沢上流の標高800m～1200m程に連なって位置しています。門西家文書から、間歩主が存在し、それぞれに独立した鉱山村であったことも明らかです。2009-2010年に両金山の測量調査が実施され、遺物・遺構の確認、内山金山の鉱山臼の搬出、遺跡内のテラス図、湯之奥３金山の位置図面（右図）を作成しました（『館だより56号』関連記事)。内山金山は、坑道や露頭掘り跡の採掘域も確認でき、山中での展開の仕方も図面に落とすことができていますが、これまで茅小屋金山の採掘域は「ここだ！」という特定ができていませんでした。しかし、このほど松江高専の久間英樹先生との共同調査により、茅小屋金山の採掘域と思しき場所を特定することができたのです。現地踏査と3Dレーザ計測による採掘跡のデータ取得なども行いました。今後詳細調査を予定していますが、長く謎だった茅小屋金山遺跡の最新調査成果をまずは速報します。



バードビュー動画展示～松江高専卒業制作×湯之奥金山博物館～

遺跡調査で大いにご尽力いただいている久間英樹先生のご協力のもと、松江高専卒業製作の展示が映像シアター入口付近に新たに追加されました。新展示は、湯之奥中山金山遺跡の坑道を３次元レーザ計測で計測したバードビュー動画を上部から投影したもの。軽快なBGMとともに、まるで坑道内を散歩しているかのような感覚でご覧いただけます。簡単に見ることができない山奥にある遺跡内の、さらに奥の坑道の中。金山で作業した人々がどのように掘って、その結果、どのような形で坑道が残っているのか、随所に思いをはせながら臨場感あふれる映像をお楽しみください。

第10回「金山遺跡・砂金研究フォーラム」のお知らせ

■期日：2022年2月5日(土)　於　映像シアター
■時間：午後1時～午後4時10分　（12時10分～受付　12時30分～館長によるプレトーク）
■主催・企画：湯之奥金山博物館応援団「Au会」
■参加費：500円(資料代として)　■会場定員：40名　※要事前申込

発　表　者　（発表者の都合により発表順番・内容などの変更の場合もあります）

犬伏弘樹(岐阜県)「素人砂金掘り師は鉱業権を取れるのか？」
木村伸之(滋賀県)「京都鴨川の砂金掘り」
三**木昌信**(兵庫県)「香川県の砂金」
中村軒一(愛知県)「駿河の今川氏親と金山衆」
広瀬義朗(岐阜県)「高山市六厩の金山を探して」
野村敏郎(兵庫県)「砂金採取道具の自作」/「Bateaと揺り板の量産用工作機の製作」

ポスターセッション
古屋憲一(北海道)「北海道鷹泊　昭和30年頃の砂金・砂白金の採集」
広瀬義朗(岐阜県)「岐阜県高山市丹生川地域の柴金遺構分布」/「田子の浦産金地の今昔」

博物館からのお願い

予定しているすべてのイベントは、今後の感染症拡大状況によって、延期･中止の可能性があります。最新情報は、博物館HP、もーん父さんTwitter＆Facebook、館長ブログでご確認いただきますようお願いいたします。

編　集　後　記

当館は湯之奥・中山金山を中心に、常設展示室・砂金採り体験室で戦国期鉱山作業を楽しく分かりやすく紹介し、全国唯一の鉱山専門館として、今年の４月で開館から25年目を迎えます。暗いニュースが多い中、当館では44万人目のお客様をお迎えできました。

また、博物館応援団Au会との共同展示・全国の砂金を日本地図にまとめ多くの方々の注目を集めている「日本砂金地図」。皆様の熱意と想いで収集されたこれらの砂金は、２月の応援団主催の研究フォーラムに合わせて展示公開準備中です。詳細は次号の『館だより99号』にて大きく取り上げさせていただきますので、お楽しみに！

ということで、これまでの活動や対応にご賛同・応援してくださる地域の皆様のため、甲斐金山遺跡ガイダンス館、鉱山研究の拠点として初心に返りつつ、“学びのオアシス・地域博物館”としての役割をより一層充実させ果たしていくことを2022年の抱負とし、一年間、着実に歩みを進めていきたいと思います。

博物館だより
第98号　令和4(2022)年1月7日

〒409-2947　山梨県南巨摩郡身延町上之平1787番地先
TEL 0556-36-0015　FAX 0556-36-0003
博物館HPアドレス https://www.town.minobu.lg.jp/kinzan/
博物館Eメール yunoking@town.minobu.lg.jp　　もーん父さん